

【98】 河岸の桜を枯らすツタ

都市のコンクリート三面張りの河川で、何米もの高さのある河岸のコンクリートの護岸が殺風景というので、緑化しようと川沿いの道路と護岸の境界にある植込みにツタ（蔦）が植えられました。植込みには街路樹のように定間隔で大きな桜の樹が植えられており、春にはお花見で賑わいます。コンクリート護岸にツタのツルを垂らし、その葉の茂りによりコンクリートの表面を“緑化”しようという試みでしょう。

ところが、ツタは下方の河底に向かってツルを伸ばしてコンクリート壁を下っていくのと同時に、植えた人の意に反して側の桜の樹にもとりつき、その旺盛な生命力で数年経たずして次々と桜の樹を枯らしていったのです。我が家の近くに兄弟のように4本の桜樹が並んでいたのですが、端の一本は数年前に、二本目は今秋に伐り倒され、三本目は枯れた枝を取り払われ丸坊主になり、来春の開花が心配される状態です。

いつにない酷暑の真夏に三本目の桜を見ると何本もの太いツタのツルにとりつかれた桜は、まるで擬装した狙撃兵のようにツタの葉に頭から根元までスッポリ包まれて“緑の化物”という感じですが、もちろんコンクリート護岸の表面を垂れ下がって茂った葉でコンクリート面を“緑化”しているものもあるのですが、桜の樹の上へ登った奴の方がはるかに元気です。ツタにしてみると太陽光で表面が火傷するほど熱くなるコンクリート壁の上を無理に下向きに這わされるより、みずみずしくて涼しい樹の幹に取り付いて上へ登っていく方がよっぽど気持ちが良いはずです。

人間のやる事は、他の生物にとってとかく独りよがりになりがちな事は、他にも多くの事例がありますが、感心ばかりしても居られず、来春に向けて半死半生の三本目の桜を助けようと、他人の目を盗んでは桜にからみついたツタをはがしています。